

感染対策のための指針

医療法人やわらぎ
衛生管理感染対策委員会

医療法人やわらぎ 感染対策のための指針

1. 総則

医療法人やわらぎ(以下「当法人」という)は、患者または入所者や利用者の使用する施設、食器その他の設備・備品又は飲用に供する水について、衛生的な管理に努め、又は衛生上必要な措置を講ずるとともに、医薬品及び医療用具の管理を適正に行い、当法人において感染症が発生し、又はまん延しないように必要な措置を講ずるための体制を整備することを目的に、感染対策のための指針を定め、患者または入所者や利用者の安全確保を図ることとする。

2. 体制

(1)衛生管理感染予防委員会の設置

ア 目的

当法人の衛生管理や環境整備・感染症及び食中毒の予防及びまん延の防止のための対策を検討する「衛生管理感染予防委員会」を設置する。

イ 衛生管理感染予防委員会の構成

衛生管理感染予防委員会は、次に掲げる者で構成する(カッコ内は担当分野)。

- (ア) 施設長(委員長を務める)
- (イ) 副施設長および看護課長(副委員長／関係機関との連携)
- (ウ) 各事業所職員(委員／委員会内容伝達および各事業所マニュアル作成)
- (エ) 医師(医療管理)
- (オ) 看護師(医療・看護面の管理) ※感染対策担当者
- (カ) 介護職員(日常的なケアの現場の管理)
- (キ) 管理栄養士(食事・食品衛生面の管理)
- (ク) 支援相談員(情報収集／関係機関への情報伝達)
- (ケ) その他法人が必要と認める者(施設外の専門家等)

感染対策担当者は看護業務との兼務を可とする。

ウ 衛生管理感染予防委員会の業務

衛生管理感染予防委員会は、委員長の召集により委員会を定例開催(月1回)のほか、必要に応じて臨時感染委員会を開催し、「感染症及び食中毒の予防」と「感染症発生時の対応」のほか、次に掲げる事項について審議する。

- (ア) 施設内感染対策の立案
- (イ) 指針・マニュアル等の見直しと事業所への設置
- (ウ) 施設内感染対策に関する、職員への研修の企画及び実施
- (エ) 新入所者の感染症の既往の把握
- (オ) 入所者・職員の健康状態の把握
- (カ) 感染症発症者が多数発生時の応援や支援内容の取決め
- (キ) 各部署での感染対策実施状況の把握と評価
- (ク) 各部署の衛生管理及び環境状況の把握と評価
- (ケ) 感染症流行期の感染症対策における注意喚起
- (コ) 感染症業務継続計画の見直しや更新

(2)職員研修の実施

当施設の職員に対し、感染対策の基礎的内容等の適切な知識を普及・啓発するとともに、衛生管理の徹底や衛生的なケアの励行を目的とした感染症及び食中毒の予防及びまん延の防止のための研修を衛生管理感染予防委員会または配属部署の企画により、以下の通り実施する。

ア 新規採用者に対する研修(各事業所)

新規採用時に、感染対策の基礎に関する教育を行う。

イ 全職員を対象とした定期的研修

全職員を対象に、別に衛生管理感染予防委員会が主催する定期的な研修を年2回(2回以上)実施する。

(3)その他

ア 記録の保管

衛生管理感染予防委員会の審議内容等、施設内における感染対策に関する諸記録は3年間保管する。

3. 平常時の衛生管理

(1)法人内の衛生管理

環境の整備、排泄物の処理、血液・体液の処理等について、次の通り定める。

ア 環境の整備

法人内の環境の清潔を保つため、以下の事項について徹底する。

- (ア) 整理整頓を心がけ、こまめに清掃を行うこと。
- (イ) 清掃については、床の消毒はかならずしも必要としないが、1日1回湿式清掃し、乾燥させること。
- (ウ) 使用した雑巾やモップは、こまめに洗浄、乾燥すること。
- (エ) 床に目視しうる血液、分泌物、排泄物などが付着しているときは、手袋を着用し、0.5%の次亜塩素酸ナトリウムで清拭後、湿式清掃して乾燥させること。
- (オ) トイレなど、患者または入所者や利用者が触れた設備(ドアノブ、取手など)は、消毒用エタノールで清拭し、消毒を行うこと。
- (カ) 浴槽のお湯の交換、浴槽の清掃・消毒などはこまめに行うこと。

イ 排泄物の処理

排泄物の処理については、以下の2点を徹底すること。

- (ア) 患者または入所者や利用者の排泄物・吐しゃ物を処理する際には、手袋やマスクをし、汚染場所及びその周囲を、0.5%の次亜塩素酸ナトリウムで清拭し、消毒すること。
- (イ) 処理後は十分な手洗いや手指の消毒を行うこと。

ウ 血液・体液の処理

職員への感染を防ぐため、患者または入所者や利用者の血液など体液の取り扱いについては、以下の事項を徹底すること。

- (ア) 血液等の汚染物が付着している場合は、手袋を着用してまず清拭除去した上で、適切な消毒液を用いて清拭消毒すること。なお、清拭消毒前に、まず汚染病原体量を極力減少させておくことが清拭消毒の効果を高めることになるので注意すること。
- (イ) 化膿した患部に使ったガーゼなどは、他のごみと別のビニール袋に密封して、直接触れないように感染性廃棄物とし、分別処理をすること。
- (ウ) 手袋、帽子、ガウン、覆布(ドレープ)などは、当施設指定の使い捨て製品を使用し、使用後は、汚染処理室で専用のビニール袋や感染性廃棄物用容器に密封した後、処理業者に受け渡すこと。

(2) 日常のケアにかかる感染対策

ア 標準的な予防策

標準的な予防策(standard precautions)として、重要項目と徹底すべき具体的な対策については、以下の通りとする。

<重要項目>

(ア) 適切な手洗い

(イ) 適切な防護用具の使用

① 手袋

② マスク・アイプロテクション・フェイスシールド

③ ガウン

(ウ) 患者(利用者)ケアに使用した機材などの取扱い

・ 鋭利な器具の取り扱い

・ 廃棄物の取り扱い

・ 周囲環境対策

(エ) 血液媒介病原対策

(オ) 患者(利用者)配置

<具体的な対策>

・ 血液・体液・分泌物・排泄物(便)などに触れるとき

・ 傷や創傷皮膚に触れるとき

⇒手袋を着用し、手袋を外したときには、石鹸と流水により手洗いをする

・ 血液・体液・分泌物・排泄物(便)などに触れたとき

⇒手洗いをし、必ず手指消毒をすること

・ 血液・体液・分泌物・排泄物(便)などが飛び散り、目、鼻、口を汚染する恐れのあるとき

⇒マスク、必要に応じて(感染対策担当者から指示があったときなど)ゴーグルやフェイスマスクを着用すること

・ 血液・体液・分泌物・排泄物(便)などで、衣服が汚れる恐れがあるとき

⇒プラスチックエプロン・ガウンを着用すること

- ・ 感染性廃棄物の取り扱い

⇒ バイオハザードマークに従い、分別・保管・運搬・処理を適切に行う

- ・ 針刺し事故防止のため

⇒ 注射針のリキャップはせず、感染性廃棄物専用容器へ廃棄すること

《針刺し事故が起こった場合》

- ・ 絞りだし、流水で洗い上長報告し外来受診する
- ・ 医師上申し同日に採血施行

《採血内容》

SC-3 、 TP 抗体 、 RPR 法

HCV 抗体 、 HBs 抗原 、 HBs 抗体

HIV 抗体(スピッツ特殊)

※ 相手が特定していれば、相手も同様採血施行

※ 感染症なし ⇒ 3 か月後に上記採血施行 / 医師上申

※ 感染症あり ⇒ 1 か月後に上記採血施行 / 医師上申

《休日の場合》

みどり野医院病棟または老健看護師

《夜間帯》

翌朝、平日であれば外来で対応する

イ 手洗いについて

(ア) 手洗い : 汚れがあるときは、普通の石けんと流水で手指を洗浄すること

(イ) 手指消毒: 感染している患者または入所者や利用者、感染しやすい状態にある方のケアをするときは、洗浄消毒薬、擦式消毒薬で洗うこと

それぞれの具体的方法について、以下のとおりとする。

(ア) 流水による手洗い

排泄物等の汚染が考えられる場合には、流水による手洗いを行う。
手洗いの方法を下記の通りとする。

<手洗いにおける注意事項>

- ①まず手を流水で軽く洗う。
- ②石けんを使用するときは、固形石けんではなく、液体石けんを使用する。
- ③手を洗うときは、時計や指輪をはずす。
- ④爪は短く切っておく。
- ⑤手洗いが雑になりやすい部位は、注意して洗う。
- ⑥使い捨てのペーパータオルを使用する。
- ⑦水道栓の開閉は、手首、肘などで行う。
- ⑧水道栓は洗った手で止めるのではなく、手を拭いたペーパータオルで止める。
- ⑨手を完全に乾燥させること。

<禁止すべき手洗い方法>

- ①ベースン法(浸漬法、溜まり水)
- ②共同使用する布タオル

(イ) 手指消毒

消毒法	方法
洗浄法(スクラブ法)	消毒薬を約3ml 手に取りよく泡立てながら洗浄する(30秒以上)。さらに流水で洗い、ペーパータオルでふき取る。
擦式法(ラビング法)	アルコール含有消毒薬を約3ml、手に取りよく擦り込み、(30秒以上)乾かす。
擦式法(ラビング方) ジェル・ジェルによるもの	アルコール含有のジェル・ジェル消毒薬を、約2ml手に取り、よく擦り込み、(30秒以上)乾かす。
清拭法(ワイピング法)	アルコール含浸綿で拭き取る。

※ ラビング法は、手が汚れているときには無効であり、石けんと流水で洗った後に行うこと。

ウ 食事介助の留意点

食事介助の際は、以下の事項を徹底すること。

- (ア)看護及び介護職員は必ず手洗いをを行い、清潔な器具・清潔な食器で提供すること。
- (イ)排泄介助後の食事介助に関しては、食事介助前に十分な手洗いをを行い、看護職員及び介護職員が食中毒病原体の媒介者とならないように、注意を払うこと。
- (ウ)おしぼりの使用後は、消毒・乾燥をすること。
- (エ)患者または入所者や利用者が、吸飲みによる水分補給をする場合には、使用する都度、洗浄すること。
- (オ)感染症発症者の対応や感染流行時期は、ポリ手袋やプラスチックグローブを使用し介助すること。
- (カ)感染症が発症した場合は、使い捨て食器やコップを使用すること。

エ 排泄介助(おむつ交換を含む)の留意点

便には多くの細菌など病原体が存在しているため、看護職員・介護職員が病原体の媒介者となるのを避けるため、以下の事項を徹底すること。

- (ア)おむつ交換は、必ず使い捨て手袋を着用して行うこと。
- (イ)使い捨て手袋は、1ケアごとに取り替える。また、手袋を外した際には手洗いを実施すること。
- (ウ)おむつ交換の際は、患者または入所者や利用者一人ごとに手洗いや手指消毒を行うこと。
- (エ)おむつの一斉交換は感染拡大の危険が高くなるので可能な限り避けること。

オ 医療処置の留意点

医療処置を行う者は、以下の事項を徹底すること。

- (ア)喀痰吸引の際には、飛沫や接触による感染に注意し、チューブの取り扱いには使い捨て手袋を使用すること。
- (イ)チューブ類は感染のリスクが高いため、経管栄養の挿入や胃ろうの留置の際には、特に注意すること。
- (ウ)膀胱留置カテーテルを使用している場合、尿を廃棄するときには使い捨て手袋を使用してカテーテルや尿パックを取り扱うこと。また、尿パックの高さに留意し、クリッピングをするなど、逆流させないようにすること。
- (エ)点滴や採血の際には、素手での実施は避け、使い捨て手袋を着用して実施すること。
- (オ)採血後の注射針のリキャップはせず、そのまま針捨てボックスに入れること。

カ 日常の観察

(ア)職員は、異常の兆候をできるだけ早く発見するために、患者または入所者や利用者の体の動きや声の調子・大きさ、食欲などについて日常から注意して観察し、以下に掲げる健康状態の異常症状を発見したら、すぐに、看護職員や医師に知らせること。

(イ)医師・看護職員は、栄養摂取や服薬、排泄状況なども含めて全体的なアセスメントをした上で、病気の状態を把握し、状況に応じた適切な対応をとること。

<注意すべき症状>

主な症状	要注意のサイン
発熱	・高熱が出ている。 ・ぐったりしている、意識がはっきりしない、呼吸がおかしいなど全身状態が悪い ・発熱以外に、嘔吐や下痢などの症状が激しい
嘔吐	・発熱、腹痛、下痢もあり、便に血が混じることもある。 ・発熱し、体に赤い発疹も出ている。 ・発熱し、意識がはっきりしていない。
下痢	・便に血が混じっている。 ・尿が少ない、口が渇いている。
咳、咽頭痛・鼻水	・熱があり、たんのからんだ咳がひどい。
発疹(皮膚の異常)	・牡蠣殻状の厚い鱗屑が、体幹、四肢の関節の外側、骨の突出した部分など、圧迫や摩擦が起こりやすいところに多く見られる。非常に強いかゆみがある場合も、まったくかゆみを伴わない場合もある。

4. 感染症発生時の対応

(1)感染症の発生状況の把握

感染症や食中毒が発生した場合や、それが疑われる状況が生じた場合には、以下の手順に従って報告すること。

ア 職員および患者または入所者や利用者の健康管理上、感染症や、食中毒を疑ったときは、速やかに職員も含めた症状の有無(発生した日時、階及び居室ごとにまとめる)について施設長(委員長)に報告すること。

イ 施設長(委員長)は、(1)について職員から報告を受けた場合、施設内の職員に必要な指示を行うとともに、4.(5)に該当する時はその受診状況と診断名、検査、治療の内容等について地域保健所に報告するとともに、関係機関と連携をとること。

岩見沢保健所 :0126-20-0100

南幌町保健福祉課:011-378-5888

(2)感染拡大の防止

職員は感染症若しくは食中毒が発生したとき、又はそれが疑われる状況が生じたときは、拡大を防止するため速やかに以下の事項に従って対応すること。

ア 介護職員

- (ア)発生時は、手洗いや排泄物・嘔吐物の適切な処理を徹底し、職員を媒介して感染を拡大させることのないよう、特に注意を払うこと。
- (イ)医師や看護婦の指示を仰ぎ、必要に応じて施設内の消毒を行うこと。
- (ウ)医師や看護婦の指示に基づき、必要に応じて感染した患者または入所者や利用者の隔離やゾーニングなどを行うこと。
- (エ)別に定める事業所マニュアルに従い、個別の感染対策を実施すること。

イ 医師及び看護職員

- (ア)感染症若しくは食中毒が発生したとき、又はそれが疑われる状況が生じたときは、被害を最小限とするために、職員に適切な指示を出し、速やかに対応すること。
- (イ)感染症の病原体で汚染された機械・器具・環境の消毒・滅菌は、適切かつ迅速に行い、汚染拡散を防止すること。
- (ウ)消毒薬は、対象病原体を考慮した適切な消毒薬を選択すること。

ウ 医師(管理者)

協力病院や保健所に相談し、技術的な応援を要請したり、指示をうけること。

(3)関係機関との連携

感染症若しくは食中毒が発生した場合は、以下の関係機関に報告して対応を相談し、指示を仰ぐなど、緊密に連携をとること。

- ・ みどり野医院
- ・ 岩見沢保健所
- ・ 南幌町保健福祉課
- ・ 社会福祉法人 南幌福祉会

また、必要に応じて次のような情報提供も行うこと。

- ・ 職員への周知
- ・ 家族への情報提供と状況の説明

(4)医療処置

医師は、感染症若しくは食中毒の発生、又はそれが疑われる状況の発生について報告を

受けた際には、感染者の重篤化を防ぐため、症状に応じた医療処置をすみやかに行うとともに、職員に対して必要な指示を出すこと。

また、診療後には、岩見沢保健所への報告を行うこと(5. に詳述)。

(5)行政への報告

ア 市町村等の担当部局への報告

施設長(管理者)は、次のような場合、迅速に岩見沢保健所に報告するとともに、南幌町保健福祉課にも対応を相談すること。

<報告が必要な場合>

- ① 同一の感染症や食中毒による、またはそれらが疑われる死亡者・重篤患者が発生した場合
- ② 同一の感染症や食中毒の患者、またはそれらが疑われる者が 5 名以上又は在籍人数の半数以上発生した場合*
- ③ 通常の発生動向を上回る感染症等の発生が疑われ、特に施設長が報告を必要と認めた場合

<報告する内容>

- ① 感染症又は食中毒が疑われる人数
- ② 感染症又は食中毒が疑われる症状
- ③ 上記の症状者への対応や施設における対応状況等

イ 岩見沢保健所への届出

医師が、感染症法、結核予防法又は食品衛生法の届出基準に該当する患者または入所者や利用者、その疑いのある者を診断した場合には、これらの報告に基づき岩見沢保健所等への届出を行う必要がある。

5. その他

(1)入院および利用予定者、新規入院・利用者の感染症について

当法人は、感染症をまん延させる危険を除き、入院及び入所・利用予定者が感染症等の既往であっても、原則としてそれを理由にサービス提供を拒否しないこととする。

(2)入院及び入所(利用)・退院(退所)の制限について

当法人は、感染症又は食中毒がまん延する恐れがある場合は、入所(利用)の制限や退院(退所)を行なう場合がある。

(3)指針等の見直し

本指針及び感染症対策に関するマニュアル類等は衛生管理感染予防委員会において定期的に見直し、必要に応じて改正するものとする。

<添付資料>

・職員および同居家族の感染症及び食中毒発生(疑い含む)の検査扱いフローチャート

附則

この指針は、令和元年4月1日から施行する。

この指針は、令和4年4月1日より改正する。

この指針は、令和5年4月1日より改正する。

この指針は、令和6年5月1日より改正する。